



角川文庫

—3302—

牙の時代

小松左京



角川書店



角川文庫

きば じ だい
牙の時代



昭和五十年五月二十日 初版発行

定価は、カバーに
明記してあります

著作者

小松左京

発行者

角川源義

印刷者

市川市橋本伝四郎
市川市湊新田六十一

発行所

東京都千代田区富士見二ノ十三
株式会社
角川書店

電話東京(265)七二二(大代表)

落丁・乱丁本はお取替えいたします

Printed in Japan

新興印刷・本間製本

0193-130807-0946(0)

牙 の 時 代

小 松 左 京



目次

毒蛇

五

BS6005に何が起こったか

七

牙の時代

一九

サマジイ革命

二七

ト・ディオテイ

三九

小説を書くという事は

五三

解説

中井英夫
二五

毒蛇

沙漠をころがして行くと、やくざなモトシクロが、またオーバーヒートしだしやがった——腹をたててエンジンに唾をひっかけてやったが、むろんそんなものの何の役にも立ちやしない。チュンと鳴って、くさい煙と白っぽいガスがこびりついたただけだ。長い間、日中五十度近い沙漠をころがしつづけて来たんだから、ばてるのも無理はない。冷えこむ夜をえらんでころばせれば、長もちするってんだが、そんな事知った事じゃない。夜走ろうが昼走ろうが、おれはおれの好きにする。ビーコンはさつきから近くにステーションがある事を示していたし、おれはかつたるいはきらいだから、かまわずぶつとばした。エンジンは悲鳴と煙をあげはじめ、スピードはおちてきたが、おれはかまわずアクセルをしぼりあげた。モトシクロは死にかけのじじいみたいに、のどをぜいぜいわせて、それでもステーションまで丘一つこえて、二キロメートルを、よたつきながらやつと走り通した。おれはもうもうと青い煙をたてているモトシクロの奴を、先に鉄板のはいったブーツで、思いきり蹴りとばして中へはいった。

「酒と氷水だ」おれはカウンターのむこうにひかえている間ぬけづらのマシーンにいった。「それからよ、外のオンボロに冷却液とハイドロックスをくれてやれ」

「酒は何にしますか？」

ぼんだいい面で、ちゃちなビーズ玉みたいなこけおどしのランプをちかちかさせたマシンは、

びいびい声でいった。

「いきなお兄いさんは、何をのむかよ。くそあついからペーミンツのソーダ割りか？」おれはマシーンの横面に唾をはきかけた。

「テキーラだ。早くしやがれ」

マシンは、それこそ蛙の面に水という風に、テキーラのグラスと氷水のはいったジョッキをすべらしてよこした。お愛想のレモンと岩塩もついていたが、おれはレモンの切れっぱしを床にたたきつけてふみにじり、岩塩をかじって酒をのどにほうりこんだ。――機械にあたったつてしやうがないことぐらい、おれにだってわかっていた。だが、この二日、気晴しにぶち殺すねずみ一匹、鳥一羽にも出あわなかったのも、おれはむしゃくしゃしていた。おまけにこの暑さだ。暑さにやなれていたが、この沙漠を三日ぶつつづけて昼間ぶつとばすなんてきちがい沙汰をやったので、頭に来ていた。三日前、ちよつと寝心地のいい岩陰を見つけたので寝すごしちまい、日が高く上つて、おれの寝ている所にさしこみやがったので、それでお太陽てんとの野郎にむかつて腹たてて、煙のたつてるフライパンみたいな昼の沙漠をぶつとばしつづけた。寝すごしたのは、自分のせいだが、おれが腹をたてたのは、寝てるおれを照らしつけやがった太陽だ。――光線銃ガンがとどくなら、太陽の野郎だつてぶつ殺してやりたいくらいだった。

「この糞野郎！ 赤ッ尻けつ！」おれは沙漠をぶつとばしながらぎらぎら煮えたぎっている太陽にむかつてわめき、本当に二発ほど太陽にむかつてぶつばなした。「殺せるもんなら殺して見やがれ！ まんまるまる面の芸無しめ！」

「あのモトシクロ、だいぶばててますよ……」建物から、フレキシブルアームとパイプをのばして、おれのオンボロをいじくつていたマシーンが、まのびした声でいった。「バルブとイグニッションがやきついてます。とりかえなきゃ……」

「酒だ」とおれはいった。「ここに新しい奴はおいてるか？」

「中古ならおいてますが……けっこう走れますよ」

「さっき見たが裏の方にピカついたのがあったじゃないか」

「あれはあずかりもんです」

「じゃいいよ。中古をくれ」おれはカードを出して、カウンターにおいた。「それから——そいつに水を三ガロンと、酒二本、食い物を三、四日分つんどいてくれ。光線銃と線源半ダースも……ハイドロックスも五本ばかりくれ」

「そんなに？」マシンはビイビイいった。

「それじゃ、あなたはのれませんよ」

「いいってことよ！ お前の知った事か！」おれは氷水の半分はいったジョッキをカウンターにたたきつけた。ジョッキはこなごなにわれてすつとんだ。「機械はいいつけられた通りやってりゃいいんだ。つべこべぬかすとまぬけ面に熱いのをたたっこむぞ！——氷水と、それから酒だ」

マシンは、意見はいうが口ごたえはしない。だから、人間とも何とかやって行けるんだらう。それでも、その「意見」が気にいらないうるんで、ぶちこわされたマシーンだって多い。意見

などいわせないようにすりゃいいんだが、それではマシンの値打ちは半減してしまふ。痛し痒しってとこだ。何だって世の中ってやつは、こうも腹ばかりたつようにできているんだらう。

「表のボロを走らせな」カウンターの上の破片をかたづけて、三杯目の酒と二杯目の氷水をすべらしてよこしたマシンに、おれはいった。「沙漠の方へむけて、まっすぐ走らせるんだ」

「エンジンがやけてかかりませんが……」

「そこを何とかするんだよ。——早くしな」

背後でモトシクロが、しめ殺されそうな音をたてるのを、おれはピリつく酒を舌の上にころばせながらきいていた。

せきこむようにエンジンがかかり、死にそこないの心臓のような音が、今にも消えそうになり、また打ちはじめ、大きくなったり小さくなったりしながら遠のいて行くのを、ゆっくり耳でたのしみながら、おれはのどのやけるような酒をのみくだし、それからろくすっぽふりむきもせず、戸口へむかってぶっぱなした。一発でボロ機械は白煙をあげて木っ端みじんにあきとんだ。——燃料の残りと、距離の計算をわずかにまちがえて、砂まじりの爆風が、戸口の所までやっとなどいたが、おれのすわっている所までとどかなかったので、気分をこわされることはなかった。いまいましいボロ機械があつとぶと、それをまき上げた時に、前歯を三本へしおって、きんたまを片方ふみつぶしてやったへなちょこ野郎の面のことも消えてさっぱりした。

「次のモトシクロに、品物をつみましたが！」
とマシンはいった。

「けっこう——ところでちょっときくが……」

おれは首にかけた鎖をひっぱり出し、その先についた金属のプレートのカウンターにおいた。

「わかってるだろう？——これと同じやつを持っている男をさがしているんだ」

「ハンティングですね？」

「よけいな事いわなくなっただけいいんだ。このうすのろ！」おれはカウンターに二つめのジョッキをたたきつけた。「きかれた事に答えりゃいいんだ。さあ、どうなんだ。このあたりにいるのかいないのか？」

「プレートを端末においでください」とマシンはいった。

カウンターの奥の方にある浅い凹みから、おれは自分のカードをとり上げ、かわりにプレートを鎖についたままおいた。

「ええ、います……」とマシンはたくさん目の目玉をパチパチ点滅させて答えた。「たしかにこのエリアに登録されています」

「ありがたいこった……」おれはニヤリと笑った。「で、どこにいる？」

「それはわかりません。おとつい、三十キロほどはなれたステーションで、カードをつかっています」

「それはどっちの方角だ？」

「南西です。ですけど、今はどこにいるかわかりません」

「お前、データをもっているんだろう？——そいつはどんなやつだ？ 強いかな？」

「すごいですよ。もう息子、三人殺しました」

そうこなくっちゃ……と、おれはまた齒をむき出して笑った。やっぱり本人でなくちゃ張りあいが無い。顔も知らないが、どうせおれ同様の青二才の兄弟が、そいつにとってかわっていたんじゃない……。

「どんな面をしてるんだ、写真はあるんだろう？」

「ちよっと待ってください」

マシンはビイビイ鳴ると、正面のCRTに一枚の男の写真をうつし出した。——肥って、でかくて、鬚だらけで、見るからに凶悪そうな面だった。黒い髪に黒い鬚、それに黒い帽子をかぶって黒いシャツを着ている。そいつは齒の一本欠けた口をあけて笑っていたが、その笑いはちつともそいつの凶悪な感じをやわらげてやしなかった。かえってそいつの内面にかくされている残忍さ、冷酷無情さ、胸のむかつくような卑劣邪悪さ、蛇のような執念深さといったものをむき出しにしていた。おれはその笑った顔を見たたん、そいつの臭い一物を鼻先におしつけられて嘲笑われたみたいな気がして、反射的に両面にむかって唾をはきかけた。

「ようし、もういい……」おれは胸のむかつきをおさえて、袖で口をふいた。「もういいっていつてるんだ。早くそいつの小汚ねえ面を消しちゃえ！」

こうこなくっちゃ……と、おれは鎖の先のプレートを、胸とシャツの間にしまいながら、口を歪めて思った。——あの畜生なら、やりがいがあるってもんだ。手強（てごわ）そうで、海千山千で、情容赦ないしたたかものらしいが、それだけにこっちだってやりがいがある。

外へ出ると、手に入れた中古のモトシクロが、山のように荷物をつんで待っていた。あちこちうす汚れているが、まだ結構頑丈そうだ。おれはそいつのリモコン操縦器をひっぱり出してエンジンを開始した。それから馬の手綱をひくようにモトシクロを後にひっぱりながらゆっくり歩き出した。モトシクロはごろごろとついてきた。おれはすぐ南西の方へ行かず、ゆっくりとステーションの裏手の方へまわって行った。裏手には、このステーションへ来ている動力ケーブルが、沙漠の砂にもぐりこんでいるのが見えた。おれは光線銃をぬくと、まずその動力ケーブルをうち、つづいてステーションの屋根の、レーダーやビーコンのアンテナをうちおとした。これでステーションの中でまぬけ面しているマシンは死んだ。奴がどんな自己防衛装置をもってるか知らないが、もとをやられちゃどうにもなるまい。

おれは横手にアームロックでつながれている新品のピカピカしたモトシクロ——誰かのあずかりものだといっていたが、そんな事はかまったことじゃない——の傍へ行き、まだ後生大事にハンドルをつかまえているロックをやき切った。それからステーションの倉庫にはいり、もう一本の飲料水のガロン罐と、燃料の燭二本、それにサイドバッグにはいるだけの線源をとり出し、新品のモトシクロにつんだ。線源の一つの安全キャップをはずし、テキーラグラスの受け皿の上にのせて倉庫の入口の日かげにおいた。まわりにハイドロックスの燭をいっぱいならべ、最後にカウンターからとって来た大きめの氷の塊を、受け皿の上に、線源とならべておいた。——日かげだったが、このあつさじゃ、のんびりもできない。おれは新品のモトシクロにまたがると、中古シクロの操縦器を手にもって、すたこら逃げ出した。一キロほど行った時、暑さでとけた氷の

水が、受け皿の中で線源をショートさせ、背後でものすごい爆発がおこった。おれはシクロを砂丘のむこう側へつつこみ、とびおりて顔を伏せた。一キロはなれて、砂まじりの衝撃波が、おれの帽子をふつとばし、つづいて爆風が砂を吹きちらした。ハイドロックスが何本あったか知らないが、派手にやったもんだ。赤黒い焰と黒煙がぐわっと宙天にふき上げ、建物の屋根がロケットのようにまっすぐやけただれた青ガラスみたいな空へふつとぶのが見えた。おれは砂をはらって立ち上ると、帽子をひろい、またモトシクロにまたがった。ヘッ！と肩をすくめたい気持ちだった。——あとからきた奴は、このへんにあるはずのステーションが、土台だけになっているのを見てぶったまげるだろう。水がなくて、エンコして、沙漠の中でひからびて、ミイラにでもなりやがれ、だ。こちらはもういたただけのものはいただいた。むろん、ぶつとばしたって直接的には何の得もない。だが、直接的にはなくとも、とにかく他人の不利益は自分の得だ。——おれは小さい時から、そう教えられたし、何百遍となくいやというほどその事を思い知らされたし、自分自身でそれが真理だという事をつかみとりもした。ほかの奴もそれが当り前の事だと信じていたし、おれも信じていた。

もし、このあたりでミイラになる奴が、おれの知らない——だがおれと同じような目的をもった——おれの兄弟だったら、おれのした事は、はつきりとおれの得になる。もし、赤の他人だったら——そんな事知っちゃいない。沙漠のお太陽も禿鷹も、別におれの肉親と、そうでない奴を区別しないだろう。

おれだってしない。

日中の気温は幾分さがったが、くそ面白くもない沙漠はきりもなくつづいた。くだらない景色には、餓鬼の時からなれっこになっていたが、おれの育った場所よりも、まだくだらない風景というものがある、という事をはじめて知った。見わたすかぎり、のべつとした灰色の砂がつづき、赤茶けた石がごろごろころがり、たまに地下水のありそうな所には、無愛想でグロテスクで、棘だらけで、あちこち癩病やみみたいに白くただれたサボテンが、阿呆みたいにつたつたっているだけだ。ねじくれまがつて、葉らしい葉もない、灰緑色の灌木が、ところどころにぼさつとはえている。砂はカンカンにかたまってくるくせに、一風吹けば眼もあいていられないような、熱く細かい粒がとんでくる。タンブリング・ウイードがころがってくる事もあるが、およそあんな馬鹿げた草は見たことがない。時々このっている岩山もぎざぎざしているだけで、味も素っ気もない。そのくせ人がのぼろうとすると、とてつもない岩のかけらをふらせたりしやがる。

ここでは、地面も岩も、植物も動物も、何もかも灼かれ、ミイラになる寸前までカラカラに乾かされ、生きるか死ぬかの瀬戸際にいつも立たされているため、いじけて、苛酷で、意地悪で、愛想なしになってしまっている。——だが、おれにはその方が、いっそ気楽な感じだった。好きにやなれそうもないが、べたつかれるよりやましだ。おれは酒をのみ、水をのみ、岩陰にテントをはって飯を食い、眠り、モトシクロをころがしつづけた。——サボテンの仏頂面に出くわすと、時々癩にさわって、光線銃でぶつとばした。幹に、鼻のすんでる穴を見つけたりしたら、のがす

事はなかった。

そのほかの面白い事といったら、ほとんど何もなかった。おれは時折りむかつ腹をたてて、岩やモトシクロを蹴つとばした。すぐ頭にくる点では、人後におちない方だったが、こう毎日腹をたてつづけ、おまけにそいつが情容赦ない太陽にじりじりあぶられつづけると、怒りがだんだん煮つまって、まっくらでねばねばしたやにタールのような毒にかわって行くみたいだった。

五日間もころがしつづけて、その間獲物らしい獲物は、毒トカゲ一匹だった。いやにまるまる肥って、七十センチもあるそいつは、赤い岩の上まだらにいて、黒っぽい鼻先から、黒くて長い鞭のような舌を、するり、するりとのぞかせながら斑点にかくれてどこにあるんだかわからない小さい眼で、おれの方を見ていた。こいつ、眼がんをつけやがったな、とおれはつぶやいたが、こんなやつをまともに相手にする気は起らなかった。岩の間にはさまっていた細い枯枝をつかつて、その生意気な、赤っぽい眼をつぶしてやろうとした。

「そんなけつめどみたいな眼を持つてたつてしょうがねえだろう」と、おれはそいつにいつてやった。「ほれ、もう二度とまぶしくないようにしてやらあ」

だが、こいつはとんだ誤算だった。おれはその太つちよ野郎を甘く見ていた。毒トカゲつてやつは、つぶれたソーセイジみたいなぶざまな恰好で、短い四肢でよちよち歩いてるが、かみつく時は意外にすばやいんだ。黒い、長い舌を、ぺろり、ぺろりと出して、おれの近づけた小枝の先を見ていたそいつは、いきなり、大口をあけて、シャーッと声をたてながら、おれの顔にむかつてとびかかって来た。黒い口がばくつとひらかれ、下顎のまがった毒牙が、毒液をしたたらせな